初めより（もともと）おしなべての上宮仕へし給ふべき（当然「べし」体 断定「なり」用 ⓢ作者→桐壺）きは（身分）にはあらざりき（打消「ず」用 過去「き」終）。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなく（むやみに）まつはさせ給ふ（使役「す」用 ⓢ作者→帝）あまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることのふしぶしには、まづ召し（参り上ら）まう上らせ給ふ（使役「す」用 ⓚ作者→帝）ある時には大殿籠り（おやすみになる・「寝」の尊敬語 ⓢ作者→帝）過ぐして、やがて候はせ給ひ（使役「す」用 尊敬「す」用）など、あながちに御前去らずもてなさせ給ひ（過去「き」体 ⓢ作→桐壺）しほどに、おのづから軽き方にも見えし（過去「き」体 見ゆ・下二 意 見える・見せる）を、この皇子生まれ給ひ（ⓢ作→皇子）てのちは、いと心ことに思ほしおきて（完了「たり」已）たれば、坊にも、ようせずは、この御子のゐ（ⓢ作→帝）給ふべき（推量「べし」体）なめりと、一の皇子の女御はおぼし（存続「り」終）疑へり。人より先に参り（帝が）給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひ聞こえさせ（尊敬「さす」用）給ひける。かしこき御かげをば頼み聞こえながら、おとしめ疵を求め給ふ人は多く、わが身はか弱く、ものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。

（桐壺の更衣は）最初から普通の（女官のように）天皇のおそばで御用をなさるような身分ではありませんでした。世間の評判も格別で、貴人らしく振舞っていらっしゃったが、（帝が）むやみに絶えずおそば近くにいさせなさる結果、しかるべき管弦の遊びのときどきや、（また）何事に（つけても）大事な催しの折ごとにははじめに（このお方を）参上させなさる、ある時はお寝過ごしになってそのまま（翌日も）おそばにおとどめになるなど強引に（いつも）御前からお放しにならずお世話なさっているうちに、自然と身分の軽い女房のようにも見えましたがこの皇子がお生まれになってから後は、格別に思い定めて（このお方を）お取り扱いになったので、東宮にも、悪くするとこの皇子がお立ちになるかもしれない、と一の皇子の（母君である）女御は思い疑いました。（この女御は）他の方々よりも先に入内なされて、（帝が）大切な方だとお思いになる思いは並々でなく、皇女達も（お生まれになって）いらっしゃるので、この御方のご忠告だけは、なんといっても厄介につらくお思いになられるのでありました。帝のもったいない御庇護を頼み申し上げてはいるものの、軽蔑し、（更衣の）あらさがしをなさる人は多く、自身はか弱く、なんとなく頼りない様子で、かえって帝の寵愛をいただかなかった方がましだったという思いをなさる。お部屋は桐壺である。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/